11 月 21 日のメッセージ

聖書：サムエル記上　16：　1 – 13

「これがその人だ」

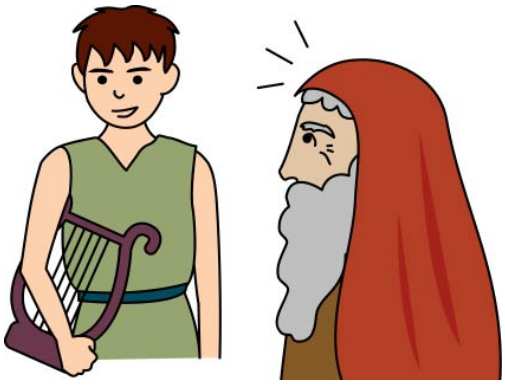
神の約束を待つことができないのは、辛い思いをしているからだけではありません。次の約束が始まっているのに、まだ以前のことに囚われてしまう。それが人間です(「サムエルは死ぬ日まで、再びサウルに会おうとせず、サウルのことを嘆いた。主はサウルを、イスラエルの上に王として立てたことを悔いられた。」サムエル記上 15:35)。自分の思っている通りの救いが示されなければ、それを救いだと認識できないのです。

それでも神は人間を用いられることを諦められはしません。人間をもう一度立ち上がらせ、神の働きへと招かれます(「主はサムエルに言われた。『いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。』」サムエル記上 16:1)。ここでようやく気づかされたサムエルはまた神の招きに応え、エッサイの元へ赴きます。ここでも神は忍耐されます。人間の目にはふさわしい人物だと思える者を神は選ばれません(「しかし、主はサムエルに言われた。『容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。』」サムエル記上 16:7)。ただその時が来るのを待っておられます。そして、ダビデが現れた時、神はサムエルに油を注ぐように命じられるのです(「エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。『立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。』」サムエル記上 16:12)。

ダビデは王として神のこの部分、忍耐し続けるところに学ぶべきでした。しかし、彼は何度も神を裏切ります。自分の中の欲望に抗うことができずに王としての権力を振りかざし、神から離れてしまいます。その度に神は、「慈しみを約束したのだから」とダビデを見捨てられはしません(「とこしえの慈しみを彼に約束し／わたしの契約を彼に対して確かに守る。」詩編 89:29)。

人間ならば諦めてしまいそうな時も神は忍耐し、時が満ちるのを待たれます。それこそが王の職務だと言わんばかりに(「イエスは彼らを見つめて言われた。『人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。』」マルコによる福音書 10:27)。何度も繰り返し人を送り、預言者を立て、立ち帰りを待っておられます。その神の忍耐のしるしこそ、独り子イエスを与えられるとの約束です。神を神とも思わない世にイエスを送り、いつも「主は共におられる」ことを明らかにしてくださるのです。

インスタントでわかりやすい救いを待っている人間を、神は、そしてイエスは忍耐し、待っておられます(「しかし、わたしが憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。」テモテへの手紙一 1:16)。



今こそ、その期待に応える時です。約束を信じて立ち上がる時です。神の招きに応えて、神の働きへと一歩を踏み出す時なのです。